

女性・豊かな海と魚



水産庁漁場保全課

東京都千代田区霞ヶ関1-2-1 Tel 03-3502-8111 内線7414 Fax 03-3595-1426

(受託者) 社団法人 日本水産資源保護協会

東京都中央区豊海町4-18 東京水産ビル Tel 03-3534-0681 Fax 03-3534-0684



水産庁

豊かな海

日本のまわりの海には、南からは黒潮が、北からは親潮が流れ、いろいろな魚介類や海藻に恵まれたとても豊かな海です。この豊かな海で営まれてきた日本の沿岸漁業は、浜の女性の力で支えられてきたと言っても言い過ぎではありません。



ワカメ干し

(第15回「豊かな海づくり大会」写真コンテスト入選作品、全国漁業協同組合連合会)



海に働く女性

—生産—

漁村に生きる女性たちは、家事や育児をしながらもさまざまな漁業活動に携わっています。



真珠の核入れ



タラの底刺し網漁



ノリの採苗



タコつぼ漁



女性の働き

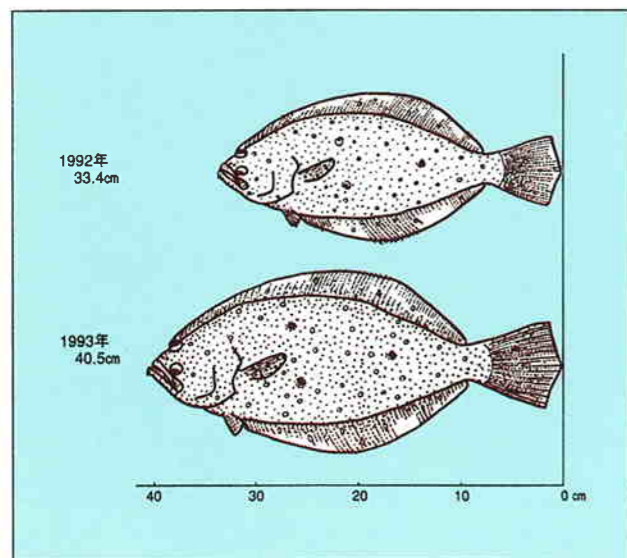
—資源の保護—

豊かな海も使い方をまちがえると不毛の海になってしまいます。

福島県の相馬原釜漁協では、沖合底曳網漁や刺網漁でとるヒラメの資源を守るために全長30cm未満のヒラメは「とらない、売らない、食べない」運動を行っています。水揚げされた魚をチェックする「ヒラメ監視員」として漁協婦人部はこの運動に大きな力を発揮しています。



ヒラメ監視員による水揚げ魚のチェック (福島県)



水揚げされたヒラメの平均全長

1992年に福島県沿岸の港に水揚げされたヒラメの平均全長は約30cmでしたが、「とらない、売らない、食べない」運動を始めた後の1993年には、40cm以上になりました。小さなヒラメは獲らないようになったのです。

消費者とともに

魚や貝の栄養の特性はとても優れています。しかし、くらし方や食事のとり方が変わり、いつの間にか家庭のなかで「魚の良さ」が忘れられてしまい、とくに若い人達は魚を食べなくなってきています。

富山県魚食普及協議会では、富山湾の美味しい魚を少しでも多くの人に食べてもらうために、女子高校生や一般の市民を対象に「お魚料理教室」を開催しています。ここで先生として活躍するのが漁協婦人部のお母さんたちです。美味しい魚の選び方やさばき方の実習が和気あいあいと行われ、たいへん好評です。



魚食普及のパンフレット (富山県魚食普及協議会)



おさかな料理教室 (写真：富山県魚食普及協議会)



環境保全

—海浜の清掃—

魚や貝など豊かな海のめぐみをいつまでも利用していくために、海的环境を守る運動が各地で繰り広げられています。ここでも浜の女性たちが活躍しています。



福井県の県下いっせいの海浜清掃活動
(写真：福井県漁協婦人部連絡協議会)



『海はごみ捨て場ではない。』

今あたりまえの秩序が守られなくなっています。きれいな海を後々まで残せるように積極的に環境問題に取り組みたいです。

茨城県・大洗町漁協・高橋早苗さん のはなし
(1994. 9 第31回・全国婦人
水産業従事者グループ合同研修会より)

—せっけん運動—

浜の人たちにとって、海はかけがえのない生活の場所です。浜の女性たちは、その海を守り豊かなめぐみと健康で住みよい環境を未来に残すために、まず自分たちでできることから活動を始めました。合成洗剤をやめて、人と海にやさしいせっけんを使う運動がいま日本じゅうに広まっています。



ミニプラントによるせっけんの製造
(写真：大分県漁協婦人部連絡協議会)



せっけんキャンペーン運動

町の人達に粉せっけんを使ってもらうように試供品を配っています。
(写真：長崎県漁協婦人部連合会)

せっけんの販売

(写真：東京都漁協婦人部連絡協議会)



森と川と海をむすぶ

浜の女性たちの活動は、いまや海や浜だけではなく、いきいきとした魅力ある地域をつくるために、農村や山村、町の女性たちとも手を取り、その活動の輪は広がり森と川と海をむすびさらに大きくなりつつあります。

一農・山・漁村と町をむすぶ一



両国駅の朝市・夕市

(農山漁村女性活動推進機構・朝市夕市実行委員会主催)
農村・山村・漁村の女性たちが、野菜や果物、魚など自慢の産物を持ち寄って開かれる朝市夕市。毎月1回JR両国駅3番線ホームは町の消費者の人達でにぎわいます。



むらおこしショップ

青森県八戸駅前にあるお店は、農山漁村の生産者と町の消費者とをむすぶ“アンテナショップ”です。



(写真：八戸農業改良普及センター)

一植樹運動一

山に木がないと少しの雨でも土砂が流れ海が濁ってしまいます。山が豊かな森におおわれていれば栄養たっぷりの水がいつも海に注ぎ、魚や貝や海藻が豊かに育つのです。

この大切な森を守るために、浜の女性たちは山に登り木を植える活動を行っています。



(写真：桜井淳史)



(写真：桜井淳史)

『百年かけて百年前の浜を』

山に木を植えてもその効果はすぐには現われません。百年後かもしれません。

むかしの豊かな浜をとりもどすために、あせらずにコツコツと植樹運動を続けていこうという思いがこの言葉にこめられています。

(北海道漁協婦人部連絡協議会 創立30周年記念事業
「お魚を殖やす植樹運動」キャッチ・フレーズ)

行動する女性が 豊かな海をつくる

いま浜の女性たちは、漁業に関することはもちろん、農村や山村、町の女性たちとも手を取り、広く、大きく、未来にも目をむけた活動をくり広げています。

こうした浜の女性たちの考え、発言、行動が、地球規模に拡大した環境問題の解決にもつながり、21世紀の豊かな海をつくるのです。



心のどこか遠くに起きたこれら無意識の波が、目覚めた意識の白い滑らかな砂の上に、偶然どんな宝ものを打ち上げるか。みごとに磨かれたどんな小石を、あるいは、海の底にあるどんなに珍しい貝を打ち上げてくれるかはわからない。にし貝、つめた貝、あるいはおいしい貝もあるかもしれない。

海は、もの欲しげな相手や食欲なもの、焦っているものには何も与えてはくれない。砂を振り返して宝を探すというやりかたは、せっかちであり、欲張りであり、さらには、自然への配慮のない行為である。

海は、柔軟性こそすべてであることを教えてくれる。柔軟性と、そして素直さ。

『海からの贈り物』より

アン・モロウ・リンドバーグ 著

落合 恵子 訳



(左頁写真：第3回「海と子供」写真コンテスト入選作品、(財)漁船海難遺児育英会)
(表紙写真：第1回「海と子供」写真コンテスト優秀賞受賞作品、(財)漁船海難遺児育英会)
(裏表紙写真：第15回「豊かな海づくり大会」写真コンテスト入選作品、全国漁業協同組合連合会)